

近代の歴史地理

序

第二次世界大戦後、わが国各地での「市史」や「町史」類の編纂事業は、町村合併促進法を契機として隆盛に赴き、その後も絶えることなく、現在に至るまで隆盛をつづけている。その執筆者をみると、今では近代の部分も専門の歴史家が担当している場合が多いようであるが、かつては、近代は地理学者が担当したり、あるいは市町村の吏員が分担したりした場合が少なくなかった。それは、日本史の研究者のなかで、近代史の専門家がきわめて少なかったからである。また近代の地方史はその研究方法があまり十分に確立されていなかったためでもあろう。一九五四年に出版された古島敏雄『地方史研究法』（東京大学出版会）をみると、内容は専ら近代地方史研究の必要性や問題点に重点が置かれ、近代地方史料の種類・所在・使い方などが例示されている。これはとりもなおさず、それまで近代地方史の研究が、一般に等閑視されてきたことの反映と言ってよいであらう。明治以後は、専門の歴史家の研究対象とは考えないという風潮が強かったのである。

歴史地理学でも、これと似たような傾向があった。一九五三年に朝倉書店から刊行された『歴史地理』（新地理講座第七巻）をみると、その書後半の「日本の歴史地理」という章は、古代から近世までで叙述が終っている。明治以降は、史料がないからというよりは、むしろ史料が多すぎて、その取り扱い方が確立していなかったために、この種の講座では歴史地理の対象から除外されたのであろう。

明治以後の歴史地理学研究が重要だということが、日本の地理学界で自覚されるようになったきっかけは、いくつかあるように思われるが、その一つは、歴史地理学会の活動であると言ってよい。歴史地理学会では一九六三年の大会で「産業革命期の歴史地理」をテーマに取り上げ、二年後の一九六五年大会では「明治後期の歴史地理」を取り上げ、それぞれ歴史地理学紀要の第六集および第八集として成果が公刊されている。

爾来二〇年近い歳月を経て、あらためてここに「近代の歴史地理」が紀要第二五集として発刊される運びとなった。この間、近代歴史地理研究は大きな進歩をとげ、研究テーマも大いに細分化、専門化して研究方法も精緻となり、また外国を対象とする実地研究の成果も加わっている。まことに慶賀すべきことと言わねばならない。

終りに当たり、本紀要の刊行に対して畠山文化財団から多額の助成金を頂戴したことを付記し、謝意を表したい。

昭和五十八年一月

浮田典良